

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 201号

平成31年1月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助導源『わが主イエスよ』より (1)

小西芳之助導源『わが主イエスよ』について

小西芳之助 明治31年(1898年)、奈良県に生れる。第一高等学校、東京帝国大学法学部卒。安田信託銀行を経て、49歳よりキリスト教伝道者に転身、日本基督教団高円寺東教会牧師として、31年間にわたり、福音伝道に尽力。特に内村鑑三及び仏教の恵心僧都の信仰より大きな影響を受け、晩年恵心流キリスト教と称した。昭和55年(1980年)、満81歳で召天。

『わが主イエスよ』は、昭和51年(1976年)から53年(1978年)にかけて、高円寺東教会で、クリスマス、新年などの機会に話された特別の説教——主に「わが主イエスよ」と称名するだけで救われ、永遠の生命を頂き、復活するものとなるという恵心流キリスト教の説教を中心に収めた説教集で、平成28年(2016年)に、高円寺東集会編、横濱大氣堂より出版された。

第1講 イエス復活の意義

(昭和 51(1976)年 6 月 27 日説教)

キリスト教の救い

キリスト教では救いということが一番大切なのです。キリスト教は、救われていなければ意味がない。『聖書』では、「救い」ということを、「新たに生まれる」、「新生」という言葉、「神の子となる」という言葉、「永遠の命を受ける」、「贖われる」、「義とされる」、「和解する」、こういうふうな言葉が聖書では使われています。この6つとも救われるという同じ内容を言い表したもののなのです。

そして、この救われるとはどういうことかという、内容は、イエスの十字架の贖いによってわれわれは罪をゆるされ、神の子とせらるると思ひ、この世においては神に守られて、主の名を呼びつつ自分に与えられた義務をなして、この世が終わったら、キリストに迎えられて天国に生れて、キリストが来給うときに復活するのである。これをキリスト教で救いという。

口では主は救い主なりと告白する

信仰だけで救われる、贖いだけで救われるというのは、ロマ書、キリスト教の建前です。しかるに不思議な事には、…ロマ書 10 章 9 節、10 節によりますと、救いの条件が二つ書いてある。一つは、イエスの復活を信ずる、すなわち贖いの成就を信ずるということ、心ではイエスの贖いを信じて、口では主は救い主なりと告白する、「わが主イエスよ」ということを救いの条件としてパウロは挙げた。…

ところがここに、パウロはロマ書 10 章 9 節において、「心に信ずるだけで救われる」と言ったが、10 節において、「主の名を言い表わす」口で言う「わが主イエスよ。主は我が救い主なり。主よ、我らの主よ」とトマスが言ったごとくに口で告白するというのを、救いの条件として挙げた。そしてこのロマ書 10 章 9 節から 13 節までをよくよく読みますと、信ずるということよりも、主の名を呼ぶことの方にパウロは **emphasis** (重点)を置いた。9 節・10 節は、原文では 1 節(ワン・センテンス)でありますけれども、「主の名を呼ぶ」という字がこのセンテンスの初めに出てきて、終わりにも出てきている。ですからパウロがいかに「主の名を呼ぶ」ということに **emphasis** を置いたかということが、文章の構造から出てくる。

パウロの emphasis

10章の9節から13節までをよくよく読んでみますと、始めの「主の名を呼ぶ」という字は、「主は救い主なりと告白する」という字になっていますけれども、最後の13節になってくると、「主よと呼ぶだけで救われる」とパウロは書いてある。これは注目すべきパウロの使い方です。

日本語の訳でも、始めは「イエスは主であると告白する」となっておりますけれども、13節の終わりには、「主の御名を呼び求める者は」となっている。日本語でも、それはよく出ております。いかにパウロは「主の名を呼ぶ」ということに重点を置いているかということがわかる。これも私は最近その emphasis がわかったのです。

日本仏教史は、ロマ書 10 章 9 節から 10 節までの旧約

「救い主の名を呼ぶ」ということは、キリスト教の歴史では、はっきり説明されていない。幸い、わが日本では、「救い主の名を呼ぶ」ということは千年間、我らの先輩がこれを研究してくれ、実験してきた。浄土宗において、浄土真宗において、あるいはまた日蓮宗において、救い主の名を呼ぶことは、日本においては千年間も研究し、実験されている。まさに日本仏教史は、このパウロのロマ書 10 章 9 節から 13 節までの旧約と見てよろしい。

親鸞は源信をほめたたえて、「高僧和讃」において、「源信広く一代の教えを研究して、念仏の一門を開いて濁世^{じょくせ}のわれわれを教えている」、「極重悪人、他の方便なし、ただ救い主の名を称してぞ、浄土に生まると述べたまう」と言って、親鸞は源信を褒めたたえる言葉を閉じた。この救い主を称えるということは、日本においては研究済みです。

贖いの力が我々に移る

われわれは、「主の名を呼ぶ」というパウロの教えに従って、「わが主イエスよ」と言うときに贖いの力が我々に移ってくる。贖いの力を吸う。麦わらで牛乳を吸うようなものなのです。牛乳がはいっていても、吸う道具がなかったら入らないでしょう。われわれは「贖い、贖う」と口でばかり、頭で知っているけれども、贖いという力が我々に移ってこない。頭で知っているだけなのだ。そんなものは駄目。頭の中にだけでは、悲しみ、苦しみに遭ったときに、そんなものは間に合わない。由来、信仰というものはあてにならない。信仰だけで救われると言っているけれども、信仰というものは、我々の頭にあるだけでは、じきに飛んでしまう。「若存若亡」^{にやくそんにやくもう}と先輩は言いましたが、それを知っているかと思ったら飛んでしまっている。そんなものはあるかないか分からない。由来、人間の信仰というようなものは当てにできない。

動かないものは贖いです。それがどうして移るかという、主の名を呼んだ時に移る。

罪のため主ともにいますを知らねども、御名を称えてこれを知るなり

法然上人の言葉

法然上人年が仰せになった言葉に、「信じても信ずべきは」、ただ十辺称えるものまで、「乃至十念の言葉、頼みても頼むべきは」必ず極楽に生まれる「必得往生の文なり」と言われた。「信じても信ずべきは乃至十念の言葉、頼みても頼むべきは必得往生の文なり」と言われた。「乃至十念」という言葉。「必得往生」という文句。これは信じても信ずべき、頼みても頼むべきものだと言いました。由来、宗教の信仰というのは、お経の文句を信じて実行することです。

この法然上人の言葉を私に当てはめましたら、

「信じても信ずべきはロマ書 10 章 9 節から 13 節まで、頼みても頼むべきはロマ書 10 章 9 節から 13 節まで」

我々の信仰の根拠は、『聖書』の文句です。

私の人生の目的は達せられた

内村先生は、大正 10(1921)年 5 月 15 日、ロマ書 3 章 21 節を講義なさいまして、我々はその講演会に出席した。…その時に、あの講義をして、内容は神の義の顕現・現われについて言われた。すなわち贖いです。きょうのイエスの贖いの成就の話なのです。われわれの信仰、われわれの行ないによらない、イエスの贖いによって救われるということをお話された日なのです。

その日の日記に、内村鑑三は「我は今日は福音の意義を闡明した。私の人生の目的は達せられた」と述懐された。先生の日記に出ている。私はその講義に列席した。

わたしがその先生の言葉を借りるならば、そのとき先生は満 60 歳、私は現在満 77 歳、1976 年 4 月 18 日のこの復活節において、満 77 歳をもって、貧しき無学無得の身をもって大胆にもロマ書 10 章 9 節から 13 節までの意味の大意を述べた。これをもって私の人生の目的は達せられたというふうに、内村先生とともに言いたい。